

# 宗谷

宗谷教職員組合

宗谷情報「ミニ」第9号 2019年9月11日発行  
発行責任者:古川 正史

〒097-0004 稚内市緑2丁目4-21 宗谷教育会館  
Tel 0162-22-2480 FAX 0162-22-2484  
web : <http://www.soya-teachers.org> Mail : [info@soya-teachers.org](mailto:info@soya-teachers.org)

メールは  
こちら



## 子どもを再び戦場に送らない！

## 平和な未来をつくるために…②

### どうやって子どもたちに伝えていくのか

今年の夏、家族の用事で広島県福山市に行く機会がありました。家族の用事なので私には「一人になる時間」がありました。家族をレンタカーで送っていき、信号待ちで横を見ると、「福山市人権平和資料館」という建物がありました。「隣に図書館っぽいところもあるし、1時間ぐらい見学して仕事するか～」と軽い気持ちで突撃訪問。資料館の方はとても親切な方で、稚内から来たことを伝えると、戦争での空襲のお話や部落差別問題の様々なことを教えてくれました。結局3時間半学ばせていただきました

私の専門は社会です。戦争の話は祖父（大正9年生まれ）から聞いて育ったもので、「二度と戦争を起こさないように伝えていかなければ」という思いで教員になっています。授業で戦争の歴史を学ぶときには、自然に熱を持っていると自覚しています。「どうすれば戦争の悲惨さが伝わり、戦争はダメだ、と思ってくれるかな…」と考えながら教材研究をしていました。授業を行っていつも思うことは、

**「戦争の悲惨さは伝わり、もう二度と起こしてはいけない」**

と子どもは感想を持つけど、

**「自分には関係ない」**

と思っているのではないかと…ということです。



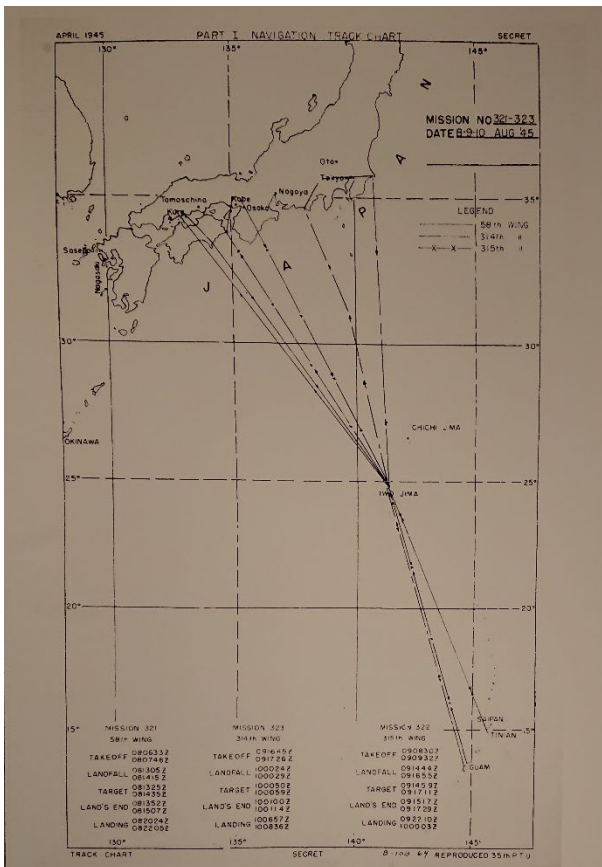
子ども2人を連れて空襲から逃げる母。田んぼで3人重なって亡くなっているのが見つかри、逃げていたときを想像して作られています。

主要都市の空襲で亡くなった人数を表す地図。太平洋側や瀬戸内などの工業都市を中心に空襲が行われたことが分かります。



1945年8月15日に終戦を迎え（道民・沖縄県民としてはこの日が終戦ではないとも思います）、74年が過ぎました。良くも悪くも平和に慣れてきているのだと思うのです。北海道は米海軍の大規模拠点基地であったサイパンや硫黄島からの距離があったため、本州・四国・九州・沖縄に比べると空襲は少ないですが、室蘭・釧路・根室で大規模な空襲があったことは有名です。最北に位置する宗谷には空襲はありません。そんな理由もあってなのか、「自分事」として捉えにくいのか…と振り返っていました。いつもモヤモヤするのです。





この悩みを資料館の方に話してみたところ、「福山もそれは同じだと思います」という答えが返ってきました。「私がお話をすると、涙を流して聞く子もいるし、感想には『戦争は絶対にダメだ』と書いてくれます。でも、現実味がないように感じるのです。」…原爆が落とされた広島市がすぐそばにあり、その二日後に空襲にあっていて福山市の子どもたちでさえ、他人事のように感じてしまう…「良い答え」を望まれた子どもたちは100点満点の答えを発表します。その時に教師は満足して良いものなのでしょうか？

米海軍の資料です。本土攻撃作戦が地図上に記されています。洋上の線は戦闘機の航路を表しています。線が集中している部分は硫黄島です。ガム・サイパンから硫黄島を通り（燃料補給など）、本土へ空襲に来ていたことがわかります。本土を守る時間を稼ぐためだけに、2万人以上の旧日本軍の兵士が国のために死ぬことを命ぜられたところ。任務されていた方の96%が戦死しました。現在も硫黄島で眠っている（見つからない）元兵士の方々がいます。

戦地から送られた軍事郵便です。ほとんど一緒に過ごすことのできなかつた息子のために、お父さんが今いる場所を「シンブン」として教えてくれる内容になっています。絵が上手だったことに目がいきますが、小さい字でびっしり書かれていることに驚きです。一番多いものでなんと千文字超！息子への「想い」が感じられます。細かく書いたことで検閲の目を紛らわせたのでは…という見解もあるようです。

ちょうど今回は特別展を行っていて、そちらも見させていただきました。検閲が厳しかった戦時中、戦地から144通もの軍事郵便が家族の元（下関）に届きました。それだけ届いたこと自体が奇跡ですが、全て残っていたことも奇跡なのです。

**「もっと、お前を愛したかった。  
もっと、一緒に夢がみたかった」**

この手紙を書いた方は南方で戦死（28歳）されています。「お前」は、息子を指していて、生前は数日間しか会うことができなかったのです。この言葉には、志半ばでこの世を去らなければならなかった方々の思いも込められているようにも感じます。平和な国・世界をつくっていくために罵り合うことは必要でしょうか？どれだけ本気で対話をするのが重要なのではないのでしょうか。教師は子どもたちの今後の人生において大きな影響を及ぼすことを自覚しながら、授業を考えていくことが重要なのです。

